

第二章 横浜 ～ ナホトカ ～ モスクワ

一 横浜港とバイカル号

四月十九日、いよいよ出発。ナホトカへと向かうバイカル号は、大棧橋に係留されていた。K叔父が出航を見送ってくれた。忙しかったはずなのに、今思えば本当に感謝したい。船が岸壁を離れ、出航に伴う「テープ投げ」のセレモニーも終わろうとしていたが、不安な気持ちはどこかに飛んでいき、心はこの日の空と同じように晴れやかだった。

バイカル号は、二泊三日で、まず本州の東海岸沿いを北へ向かって航海し、津軽海峡を抜けて日本海に出て、ナホトカ港へ向かう。船からは、最初は本州などの海岸線が眺められ、雪をかぶっているやまなみが見えた。雪をかぶっている山々の景色は、福岡市に住んでいる私には珍しかった。バイカル号が日本海に入ると海しか見えなくなった。



見送ってくれた叔父（後ろがバイカル号）



バイカル号の出航



バイカル号のデッキと見えた本州

二 ロシア人の船乗りと友達に

バイカル号の船内には、自由に出入りできる図書館があった。一日目の夜、そこで写真集などを見ていた時、ロシア人のバレリー君と知り合いになった。彼は、船乗りでアメリカや香港に何度も行って英語ができたので、私の単語を並べただけの英語でもコミュニケーションが取れた。一つの航海を終えて故郷のウラジオストクへ帰る途中ということだった。奥さんと三歳になる娘さんもいるとのことであつたが、ほぼ同じ年齢と思われる仲良くなつた。ゴーゴーを踊つたり五目並べをしたりして夜遅くまで遊んだ。直ぐには友だちを作れない私が、どうして仲良くなれたか今思えば少し不思議である。旅先でやはり解放的になつていたのであろう。

翌日は、彼の船室に案内され、彼の船乗り仲間二人にも紹介され、ウオッカ、ビール、昼食をごちそうになつた。アルコールに強くない私は、船酔いではなく真に酔つぱらつてしまい、自分の船室で二時間ほど寝てしまつた。

旅行の計画などについて話したと思うが、何を話したかは思い出せない。ただし、彼を含めた仲間たちと何枚も記念写真を撮つた。今回のウクライナ侵攻でロシア（当時はソビエト連邦共和国）には良くないイメージが先行するが、彼らは気さくで親切な人たちであつた。

なお、バイカル号の船内の様子などは、今では、旅行記のブログなどで詳しく見ることがができる。当時は、スマホどころかインターネットもなかつた。

1 例えば、ブログの『青年は荒野をめざす Vol.1 準備〜横浜港〜ナホトカ航路〜シベリア鉄道 ハバロフスク』は詳しい。

URL:<https://travel.jp/travelogue/10957307> 2023年10月17日現在。



バレリー



バレリーと仲間たち

三 ナホトカ港が見えてきた

横浜港を出て三日目、ついにナホトカ近郊の陸地が見えてきた。私にとっては初めての外国の地で、その風景に胸が躍った。まずは、遠くの間々が見え、次第にナホトカ港の入り口が見えだし、ついには岸壁で働いている人々や車が見えた。この時の胸の高まりは今でも思い出す。車は日本のものよりも大型であったが年代もののように見えた。ついに外国の地に降り立つことになった。ナホトカからは直ぐにハバロフスクに向かう列車に乗ったが、駅のお土産屋を覗くわずかな時間があり、珍しい切手が目に付いた。ドストエフスキーの肖像画の切手を買って、その切手を日本の女友だちへの手紙に使うこととした。その女友だちへは、主要な都市へ移る度に絵はがき——行く先の様々な地で美しい絵はがきが売られており旅の様子を伝えるには最適であった——を送った。手紙はこの時、一回のみだったと思う。

そして、冒頭に書いたハバロフスクへと向かう列車に乗った。



ナホトカ港



ナホトカ駅



ソ連から出した手紙の切手部分

2 合計、三十枚ほどの絵はがきを送った。少々、詳細なことが書けるのは、その絵はがきに書いた文章のおかげである。ドストエフスキーは難解だが当時の文学青年・少女にとってはアイドル。旅行中の夜の大半は、一人で外出し冒険する勇氣もお金もなかったため、はがきを書いて送って過ごした。なお、返事は郵便局留めで何回ももらった。そちらは紛失してしまった。ロシア文学では、友人のI君に進められたソルジェニーツインの『イワン・デニーソヴィッチの一日』が気に入っていた。

四 ハバロフスク〜モスクワ

寝台列車は、翌朝にはハバロフスクへ到着した。ツアーメンバーとともに、一台のバスで市内を経由しながら空港についた。飛行機は、国営航空会社アエロフロートのもので、ツアーメンバーは後方の席に案内された。エンジンが出力を上げ滑走路を滑って行くが、離陸するまでにかかなりの時間が掛かった。エンジン音がものすごく大きかった。長い滑走の後離陸すると、日本人旅行者の一大団であった我々ツアーメンバーから自然と歓声や拍手が上がった。私にとっての初めての飛行機体験であった。

アエロフロート機は、一路、モスクワへと向かった。眼下には、シベリアの凍った台地が広がっていた。機内からの写真撮影は禁じられていたと思うが、学校で教わった大河が流れている模様が見られ、ひそかにシャッターを切った。これらの景色の一つ一つに感激した。



ハバロフスクの街



エニセイ？川

五 モスクワ

モスクワで最初に驚いたことは、案内されたホテルであった。それは、「ホテル・ウクライナ」でその外観の大きさ・見事に感激した。そのような立派な建物に泊まったことはなく、見たことも初めてであったので嬉しかった。その二十二階の個室に案内され、その広さにも再び感激したが特に驚いたのはバスタブの大きさであった。テレビか小説の影響か、気恥ずかしいがこの頃からリッチな生活への嗜好があった。

その日の夕食は、今回の旅の中で最も豪華なものであった。もちろん、食事代はこのツアーの料金に含まれているため、特にオーダーしたものではないのだが——だからなのであるが様々な料理がテーブルに並べられていた。特に赤い色の付いた料理が多かったように思い出される。おそらくビーツを使ったボルシチなどがあったはずだ。料理の写真を撮っていないことは残念である。

次の日からインツォリスト（ソ連の国営の旅行会社）のガイドの案内でモスクワ市内の名所を見学した。有名な赤の広場やモスクワ大学などである。本やテレビで出てくる名所をたくさん案内された。その雄大さや美しさは、欧州世界を代表しているように思われた。ただし、後に述べるローマやパリとは異なり、ロシア正教の影響が感じられる建物が多かったように思う。

モスクワには二泊したが、夜、一度だけツアーメンバー有志数人でガイド無しで街へ出た。ただし、トロリーバスに乗ったものの、料金の支払い方法がわからずバス内で立ち往生した。結局、お金を支払わなくても降りて良いと言われたように、ホウホウの体でホテルへ引き返す程度だった。なかなか『青年は荒野をめざす』³や『さらばモスクワ愚連隊』⁴に書

3 五木寛之氏が1967年に書いた小説。2章「モスクワの夜はふけて」では、モスクワ市内でのデートの模様などの冒険が書かれている。

『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』。2021年6月20日（日）05:20 UTC URL: <https://ja.wikipedia.org/wiki/青年は荒野をめざす> 私には読んでいなかった。読んでいたら……

4 五木寛之氏の小説家としてのデビュー作。1967年、作品集の表題作として講談社から書籍化された。元ピアニストの北見がモスクワの不良少年の溜まり場のレストランで、即興演奏のブルースをモスクワの夜に響かせる。『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』。2023年6月20日（火）20:15 UTC URL: <https://ja.wikipedia.org/wiki/さらばモスクワ愚連隊> こちらも出版前には読んでいなかった。読んでいたら……

かかれているような冒険はできなかった。
 なお、詳しい記憶がなくて残念であるが、モスクワでの食事の後か、ツアーメンバーであった一人の女性に声を掛けて別のレストランで「お茶でも」と思って二人で別の店に入ろうとしたところ、店員か警備員かは分からないが厳しい表情で入店を断られた。改めてここは制限が厳しい国であることを認識させられた。女の子の前で格好良いところを見せられなかったどころか、少し怖かった。



モスクワ (かなり不正確)



ホテル・ウクライナの部屋の中で



ホテル・ウクライナの玄関で
 (ツアーメンバーたち)



ホテル・ウクライナ



赤の広場
(レーニン廟やクレムリン)



モスクワでの食事



モスクワ大学で
(インツアーリストのガイドと)



赤の広場で